DOI：10.20776/S03862097-51-P161

アルテミジア・ジェンティレスキの支援者獲得の試み

――1630年代のフランチェスコ・デステ１世宛て書簡の翻訳と解題――

川合 真木子

本稿では、17世紀のイタリアで活躍した画家アルテミジア・ジェンティレスキ（Artemisia Gentileschi/1593–1654以降）が、支援者の一人と見込んだモデナ＝レッジョ公フランチェスコ・デステ１世（Francesco I d'Este, Duca di Modena e Reggio/1610–1658）に宛てた書簡と、それに対する返信を翻訳し、解題を試みる。

以下、書簡には年代順に１から３までの番号を振り、アルテミジアの書簡をａ、対応するフランチェスコ・デステ１世の返信をｂの枝番で区別する。訳出に際しては、フランチェスコ・ソリナス編集の書簡集を底本とし、メアリー・Ｄ・ガラードの編集によるエフレム・Ｇ・カリンゲルトの英訳を適宜参照する[1]。

【翻訳】

［書簡1a］ 1635年１月25日：ナポリのアルテミジア・ジェンティレスキより、モデナのフランチェスコ・デステ１世宛て[2]

殿下、

いとも卓越せしアントーニオ枢機卿様に、私の手になる作品をお送りする機会に、殿下にも幾枚かの作品をお届けするのがよろしいのではないかと存じ至りました[3]。私が大いなる喜びをもって仕上げたこれらの作品は、イギリスの国王陛下から、陛下の御用のために私を迎えに遣わされた弟に託して、お送りいたします。とはいえ、私にはこのささやかな才能のいくばくかを、当然ながら、殿下にも捧げるべき理由があると存じます。一つ目は、私の家門が殿下のご家門の従順なしもべであるからです。二つ目は、ヨーロッ

パの偉大な君侯の皆様には全てお仕えしてきたからです。私の絵画は不毛なる木が生んだ果実であるとしても、皆様に喜ばれております。三つ目は、私の栄誉がそのように運命づけられているからです。

私のこの大胆な、また野心的で率直な意思表明をお許しください。どうか、目下弟に持たせてお送りするこの小品をご嘉納いただけますように。作品の欠点はお見逃しいただき、これらの作品が殿下のために生み出された主題につりあい、献身のみを示すものと思召して、贈り物を受け取ってくださるようにお願いいたします。これは、私が殿下に果たすべき義務だと考えて差し上げるものでございます。この義務を果たしている限り、殿下はご親切にも私の願いをかなえてくださることと存じます。恭順の印として、殿下にお辞儀をすると共に、ご家門の繁栄をお祈り申し上げます。

ナポリにて、1635年１月25日。

殿下の、いとも忠実なるしもべ

アルテミジア・ジェンティレスキ

［書簡1b］　1635年３月７日：モデナのフランチェスコ・デステ１世よりナポリのアルテミジア・ジェンティレスキ宛て[4]

アルテミジア・ジェンティレスキ様、

弟御から貴殿のご送付くださった絵画を拝受いたしました。作品の優美さによって美徳を、それらの寄贈によって貴殿の気前の良さを知りました。ご恵贈に御礼申し上げます。貴殿の思いやりを受け取ったのと同様にそのご功績に報い、感謝の念をお伝えせねばと、この通り一筆啓上した次第です。天からのあらゆる幸運をお祈り申し上げます。

［書簡2a］　1635年５月22日：ナポリのアルテミジア・ジェンティレスキより、モデナのフランチェスコ・デステ１世宛て[5]

殿下、

気前のよい殿下は、私の臣下としての捧げ物を贈り物と呼び、また殿下の

偉大さに対する従順の義務であるものを、親切な言葉による親愛の情の表明とみなしてくださいます。ここで私が申し上げる忠実な献身からの殿下への尊敬は、我が魂にはるか以前より抱いていたもので、この前のお手紙でもお示し申し上げました。この私が殿下のご家門に表明した恩義に基づく服従は、デステ枢機卿の幸福な思い出にも負けず劣らぬものです[6]。猊下からは少なからぬご愛顧を賜ったものでございます。殿下におかれましては、このような小さな贈り物をご嘉納くださり、また寛大なご様子で私の絵画を高く評価してくださり、深謝申し上げます。

実は、今まで私のカンヴァスがあまりお気に召さなかったのではないかと疑っておりました。絵を運んだ兄弟たちの消息を聞いていなかったためです[7]。ともあれ、殿下には謹んで申し上げます。殿下のご威光をもって、私に詳細をお知らせくださり、また殿下にお仕えする準備を万事整えていることにふさわしい機会を与えてくださいますように。ご用命を熱望しつつ、今は遠方よりペンに託しておりますこの献身を、いつの日か御前にてお示し申し上げたいと望んでおります。私がフィレンツェに参ります折に、モデナに立ち寄らせていただき、格別の守護者とたのむ殿下のもとでこの誓いを果たしたく存じます[8]。

それでは、ここに深々と身をかがめつつ、天からのあらゆる幸運をお祈り申し上げます。

1635年５月22日、ナポリ。

殿下の、いとも忠実なるしもべ

アルテミジア・ジェンティレスキ

［書簡3a］ 1639年12月16日：ロンドンのアルテミジア・ジェンティレスキより、モデナのフランチェスコ・デステ１世宛て[9]

殿下、

殿下のような偉大な君侯の皆様は、技をみがいてできる限り功績をあげようと望む、意欲ある人々を鼓舞してくださいます。努力を捧げることによって、望んでいた栄誉ある目的にたどり着けるのです。これは、まさに私の身

におこったことですが、目下イギリス王家にお仕えし、すばらしい名誉とご厚情を賜りましたのに、これに満足してはおりません。この野心的な願いをかなえるためには、もう一人の弟に託し、再び殿下に私の小さな成果をお見せするより他にはないと思われるのです[10]。弟は私の主である王后陛下の御用で、イタリアに参ります。作品は完全さを欠いてはおりますが、殿下への心からの尊敬にあふれております。また、生来の未熟さに由来するその不完全さはお見逃しくださいますように。私の骨折りは全てのヨーロッパの君侯から喜ばれてきましたし、他の機会にお示しくださった寛大な思召しと共に、特に殿下にはご好評いただいたのをご考慮くださるようにお願い申し上げます。

私はこの決断を王后陛下と母后陛下の同意なしに行ったのではありませんので[11]、殿下もこの作品をお厭いにはならないでしょう。むしろ、あえて申し上げれば、お認めいただけるのではないかと存じます。

ここに、献身的な熱意をもって、殿下と殿下の思いやりに対して、神に善き結果をお祈り申し上げます。

ロンドンにて、1639年12月16日。

殿下のいとも忠実な、そして献身的なしもべ

アルテミジア・ジェンティレスキ

［書簡3b］　1640年３月16日：モデナのフランチェスコ・デステ１世よりナポリのアルテミジア・ジェンティレスキ宛て[12]

アルテミジア・ジェンティレスキ様、

ご恵贈くださった絵を大変うれしく思うと共に、なお絵に添えられた貴殿の愛情深い言葉を非常に喜ばしく思いました。それぞれの作品とお言葉に感謝申し上げます。貴殿が遠方より私への義務を果たす方法を考案してくださったのですから、流儀に則り、貴殿のご満足のためにこの通りお応えできるとすれば、私もうれしく思います。また、大いなる喜びと繁栄を神にお祈り申し上げます。

【解題】

史料について

書簡1aから書簡3bは、画家アルテミジア・ジェンティレスキが支援者の一人にしようと目論んでいた、モデナ＝レッジョ公フランチェスコ・デステ１世（以下フランチェスコ１世とする）に宛てたものとそれに対する応答である。全て、モデナ国立文書館のエステ家機密文書中に保管されている[13]。なお、アルテミジアの書簡は原本であるが、フランチェスコからの返答は、同じ文書の中に草稿として残されたものである[14]。アルテミジア・ジェンティレスキが知人や注文主に宛てた書簡は、約60通が知られているが、多くの場合、彼女の出した書簡に対する返信は保存されておらず、フランチェスコ１世とのやり取りは支援者側からの返答を伝える珍しい事例であるといえる[15]。

アルテミジア・ジェンティレスキの1630年代

アルテミジア・ジェンティレスキは、画家オラツィオ・ジェンティレスキ（Orazio Gentileschi/1563–1639）の娘としてローマに生まれ、修業の後、フィレンツェやヴェネツィア、ナポリ、ロンドン等で活動した。父の友人で、1600年代初頭にローマを席巻したカラヴァッジョ（Michelangelo Merigi, detto il Caravaggio/1571–1610）の影響を修業時代から強く受け、数少ない女性カラヴァッジェスキ（カラヴァッジョ派の画家）の一人として欧米では有名な存在である[16]。

彼女がナポリに拠点を移して活動していた1630年代は、比較的書簡が多く現存する時期である。特に1635年には、今回取り上げるフランチェスコ１世の他に、ローマの芸術品コレクターであったカッシアーノ・ダル・ポッツォ（Cassiano dal Pozzo/1588–1657）、トスカーナ大公フェルディナンド２世（FerdinadoⅡ de Medici/1610–1670）、天文学者として有名なガリレオ・ガリレイ（Galileo Galilei/1564–1642）らとの書簡のやり取りが知られている[17]。

図１　アルテミジア・ジェンティレスキ《洗礼者ヨハネの誕生》1633–1635年頃、カンヴァスに油彩、184×258cm、マドリード、プラド美術館

まず、1635年のアルテミジア・ジェンティレスキを取り巻く状況を確認していきたい。アルテミジアは、1630年頃からナポリに拠点を移し、特にスペインから派遣されるナポリ副王の庇護を受けていた。当時の副王は1631年に着任したモンテレイ伯マヌエル・デ・アセベド・イ・スニガ（Manuel de Acevedo y Zúñiga/1586–1653）である[18]。モンテレイ伯を通じて、アルテミジアはスペイン王フェリペ４世の離宮のための《洗礼者ヨハネの誕生》（図１）をはじめとする、いくつかの重要な作品を手掛けた[19]。

一方で、書簡1aにも表明されているように、アルテミジアは当時父オラツィオがいたロンドンの宮廷からも招聘を受けていた。通常６年の任期である副王の交代が数年のうちに迫っていることから、1635年の時点で、アルテミジアは新天地ロンドンを目指そうと考えていたとみられる。同様の意図は、やはり1635年の７月にトスカーナ大公フェルディナンド２世に宛てた書簡の中で、画家が「私はまた、フランスにつつがなく渡れるようにとサ

ヴォイア公爵夫人[20]がお約束くださったお手紙を待っておりますので、〔フィレンツェを発って〕トリノまで行く弟たちにこのお手紙と通行許可証をとってくるように言いました。」との言及を行っていることからも補強される[21]。フェルディナンド２世宛ての書簡では、同時にフィレンツェに滞在したいという希望も述べられている。アルテミジアの計画では、ナポリから北上してフランス経由でイギリスに向かう間に、中部イタリアのフィレンツェや北部のトリノの宮廷にしばし滞在し、画家として仕事をしながら旅費や宿泊の保証を得ようということだったのであろう。モデナもまた、その経路上にあるため、書簡1aで自分の作品をフランチェスコ１世に献上しているのは、滞在地の一つとして期待を持っていたからと考えられる[22]。ただし、実際には、このアルテミジアのイギリス行きは、なかなか実現されなかった。副王の交代の遅れや、アルテミジアが自身の娘の結婚を差配せねばならなかったことなどを受けて、彼女が英国へ出発するのは1638年頃である[23]。

一方、書簡3aが出された1639年の状況は大きく異なっている。このとき彼女はロンドンにいた。イギリスにおいては、父オラツィオと共に、グリニッジにあるクイーンズ・ハウスの装飾画（図２）を手掛けた[24]。オラツィオは1639年の２月にロンドンで没している。

書簡3aでは、チャールズ１世の王妃ヘンリエッタ・マリアやその母マリア・デ・メディチの許可を得ていると前置きをしているが、アルテミジアがこの時点でフランチェスコ１世に再び庇護を要請しているのは、父の死を受けて彼女がイギリスを離れる心づもりをしていたからに他ならないだろう[25]。数年後の1642年には、イギリスで清教徒革命が本格化する。アルテミジアもまたその前夜の情勢の変化を敏感に感じ取り、次の一手を模索していたことがうかがわれる。

本稿で取り上げた書簡は、既にある程度成功した画家であったアルテミジアが、30代後半から40代の前半にかけて、次なるキャリアの発展のために、新たな庇護の獲得を目指していた時期に書かれたものと看做せる。具体的な作品記述を欠くため、作品研究上は解釈が難しいが、アルテミジアのキャリアを考える上では、それぞれの書簡がナポリからイギリスへの往還の起点と終点の近くに位置している点で興味深い。

図２　オラツィオ・ジェンティレスキとアルテミジア・ジェンティレスキ《イギリス王の下の平和と学芸》1636-1638年頃、カンヴァスに油彩、892×1070cm、ロンドン、マールバラ・ハウス

芸術愛好家としてのフランチェスコ１世

さて、一連の書簡の宛先となっているフランチェスコ１世は、1629年に突如として修道生活に入った父から爵位を継ぎ、1635年に書簡1aを受け取った時点ではまだ24歳の年若い君主であった。その後、1658年に病没するまでの約30年に渡る治世において、彼は常にスペインとフランスという二つの大国の間で外交政策を展開しつつ時に軍人として多くの戦闘にも参加

図３　ディエゴ・ベラスケス《フランチェスコ・デステ１世》1638年頃、カンヴァスに油彩、68×51cm、モデナ、エステンセ美術館

図４　ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ《フランチェスコ・デステ１世胸像》1650–1652年頃、大理石、高100cm、モデナ、エステンセ美術館

しながら、エステ家の領土保全を図り、モデナの地位向上に努めていくことになる[26]。

おそらくアルテミジアがイギリス行きに際して、フランチェスコ１世を新たな支援者の候補に入れたのは、単に彼を前途有望な君主と看做したというよりも、むしろ、その芸術愛好家としての側面をいち早く察知していたからだろう。フランチェスコ１世は、当代随一の芸術家たちの作品を貪欲に収集している。例えば、今日最もよく知られているフランチェスコ１世の肖像画（図３）は、彼が1638年にスペイン宮廷に赴いた際に、同地の宮廷画家ベラスケスに依頼したものである[27]。また、晩年に、イタリア・バロックを代表するローマの彫刻家ベルニーニにつくらせた大理石の胸像　（図４）は理想的な君主のイメージとしてよく知られている[28]。さらに、フランチェスコ１世の死後、1670年に作成されたエステ家の目録からは、彼がラファエロやティツィアーノといった過去の巨匠たちの作品を多数保有していたことが分かる[29]。アルテミジアとフランチェスコ１世とのやり取りでは、残念

ながら書簡中で具体的な作品名や作品の図像に触れられていないことから、彼女が制作したであろう作品の特定ができず、また現在に至るまでエステ家に伝わるコレクションにもそれらしい作品は見つかっていない。

書簡1b、書簡3b共に、フランチェスコ１世は一貫して、君主にふさわしく非の打ちどころのない、言い換えればある種儀礼的な書面を示している。また、書簡2aにみられるアルテミジアの大げさな感謝の言葉からは、送られてきた作品に対し、フランチェスコ１世が少なからぬ金銭的な見返りを与えたことが読み取れる。自己顕示と謙遜が入り交じった文体はアルテミジアが他の顧客に送った書面にもみられるため、それ自体は特異なことではないが、数年後に書簡3aがしたためられていることからも、アルテミジアにとってフランチェスコ１世の反応は支援者として期待できるものだったのだろう。

ジェンティレスキ一族のネットワーク

こうしたアルテミジアとフランチェスコ１世のやり取りから見えてくる画家の状況や両者の関係に加え、一連の書簡を通して浮かび上がる重要な存在として、アルテミジアの弟たちがいる。アルテミジアには、フランチェスコ、ジューリオ、マルコの３人の弟がいて、いずれも一度は父オラツィオと共にイギリスに渡っている。彼らの活動は父や姉に比べて明らかにはされていないが、特に長弟のフランチェスコ（Francesco Gentileschi/1597–1665以降）は、画家というよりもむしろマネージャーとして有能な人物であったようである[30]。

特にこの1635年のフランチェスコの活動は目まぐるしい。1635年１月21日付のカッシアーノ・ダル・ポッツォ宛ての書簡によれば、アルテミジアはイギリスからやってきた弟に絵と書簡を託してローマに向かわせている。「私の必要性から、弟が４日以上ローマに滞在することは許可できかねます」という口調が示すように、フランチェスコはかなり忙しい旅をしていたようだ[31]。彼はおそらくそのまま北上し、25日付の書簡1aを携えてモデナに到達したと想定できる。

フランチェスコ１世がアルテミジアに宛てた礼状である書簡1bが３月７日付であるから、ほぼ1535年の２月の間に、ローマとモデナにおける姉の用事をこなした計算になる。また、既に引用した同年７月20日付のトスカーナ大公フェルディナンド２世宛ての書簡によれば、アルテミジアの通行許可証を取るためにフィレンツェからトリノへ向かい、それをアルテミジアのもとに届けたはずである（図５）[32]。

さらに、近年の研究によれば、イギリスからイタリアへの帰還に際しても弟のフランチェスコがアルテミジアに同行した可能性が高く、彼女がナポリへの帰路に就いたのは1640年であったことが未刊行史料の検討によって示されている[33]。従って、アルテミジアのロンドン行きに際しては、計画段階から往路復路に至るまで、弟フランチェスコの果たした役割が小さくなかったことがうかがわれる。

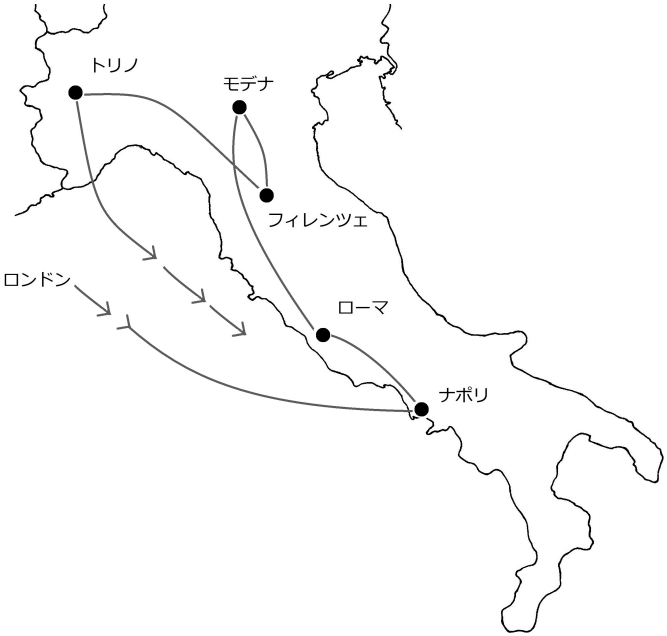

図５　1635年のアルテミジアの書簡から想定される弟フランチェスコの移動（各経路の詳細は不明）

本稿で取り上げた書簡からも、1630年代のアルテミジア・ジェンティレスキが、ナポリからロンドンへの旅を企画し、新たな支援者を募りながら野心的な活動を行えた背景には、こうした親族によるネットワークを有効に用いられる状況があったことが読み取れる。

図版出典：
図１　Copyright ©Museo Nacional del Prado
https://www.museodelprado.es/coleccion/obra-de-arte/nacimiento-de-san-juan-bautista/65572d18-d9a1-42b8-bddd-f931c4b88da6（2021年10月20日）
図２　Baldassari, Francesca, ed., *Artemisia Gentileschi e il suo tempo*. exh. cat. (Palazzo Braschi, Rome), Milan, 2016.
図３　Pérez Sánchez, Alfonso E. and Nicola Spinosa, eds., *Velasquez a Capodimonte*, exh. cat. (Museo e Gallerie Nazionali di Capodimonte, Naples), Naples, 2005.
図４　Wittkower, Rudolf, *Gian Lorenzo Bernini: the Sculptor of the Roman Baroque,* Oxford, 1981.
図５　著者作成

付記：
本稿は2018–2021年度科学研究費若手研究（課題番号18K12237）による研究成果の一部である。

注

1　Solinas, Francesco, ed., *Lettere di Artemisia: edizione critica e annotata con quarantatre documenti inediti,* Rome, 2011, pp. 94–96, 121–122; Calingaert, Efrem G., “Appendix”, in Garrard, Mary D., *Artemisia Gentileschi: The Image of the Female Hero in Italian Baroque Art,* Princeton (New Jersey), 1989, pp. 380–382, 388–389.
2　Solinas, *op. cit.*, pp. 94–95, Lettera 41. 初出：Venturi, A., *La Galleria Estense*

in Modena, Modena, 1882, p. 218; Imparatio, F., "Documenti relativi ad Artemisia Lomi Gentileschi", *Archivio storico dell'arte,* II (1889), p. 424.

3　枢機卿アントーニオ・バルベリーニ（Antonio Barberini/1607–1671）はローマ教皇ウルバヌス８世の甥で、ローマにおける芸術パトロネージの中核を担った人物の一人である。1628年、20歳で枢機卿に叙任された。Erola, Alberto, "BARBERINI, Antonio", in *Dizionario Biografico degli Italiani,* vol. 6 (1964).

　なお、バルベリーニ枢機卿への絵の贈答に関わる書簡に関しては、1635年１月21日付のカッシアーノ・ダル・ポッツォ宛ての書簡に詳しく述べられている。Solinas, *op. cit.*, pp. 87–88. 邦訳は次の通り。川合真木子「1630年代半ばのアルテミジア・ジェンティレスキとバルベリーニ家：カッシアーノ・ダル・ポッツォ宛の書簡翻訳と解題」『Aspects of Problems in Western Art History』vol. 10 (2012), 105–111頁。

4　Solinas, *op. cit.*, p. 95, note 7. 初出：Venturi, *op. cit.*, p. 214; Imparatio, *op. cit.*, p. 424.

5　Solinas, *op. cit.*, pp. 95–96, Lettera 42. 初出：Imparato, *op. cit.*, p. 424.

6　フランチェスコ１世の大おじであるアレッサンドロ・デステ（Alessandro d' Este/1564–1624）を指すとみられている。Garrard, *op. cit.*, p. 382, note 18; Solinas, *op. cit.*, p. 96, note 2. エステ枢機卿は高位聖職者としてモデナの発展に尽くすと共に、親スペイン派の代表格として多くのコンクラーベに関与する他、ティーヴォリのエステ荘を再興し、文化活動にも熱心であった。Portone, Paolo, "ESTE, Alessandro d'", in *Dizionario Biografico degli Italiani,* vol. 43 (1993).

7　従って、アルテミジアの弟フランチェスコは、５月の時点ではまだナポリにたどり着いていない。一方、フランチェスコ１世の礼状の草稿は３月に作成されていることから、フランチェスコはナポリに戻らずに次の目的地（例えばフィレンツェ）に向かったのだろう。

8　アルテミジアのフィレンツェ滞在については、約２か月後、同年７月20日付のトスカーナ大公フェルディナンド２世宛ての書簡においても語られている。ただし、フィレンツェ行きが実現されたかは定かではない。Solinas, *op. cit.*, pp. 104–105.

9　Solinas, *op. cit.*, pp. 121–122, Lettera 51. 初出：Imparato, *op. cit.*, p. 424.

10　書簡3aにおいて、アルテミジアは贈り物のことを単数形で表記しているが、

フランチェスコ１世の返信では複数形が用いられていることから、この際に贈られた絵画作品は複数あった可能性が高い。Garrard, *op. cit.*, p. 389, note 44.　このときに絵を届けたのは、アルテミジアの下の弟であるジューリオかマルコだと思われる。

11　それぞれ、イギリス王チャールズ１世の妃であったヘンリエッタ・マリア・オブ・フランス（Henrietta Maria of France/1609–1669）と、その母であったマリア・デ・メディチ（Maria de Medici/1573–1642）を指している。マリ・ド・メディシスのフランス名でよく知られている母后は、ちょうど1638年から1641年までイギリス宮廷に滞在していた。"MARIA de' Medici, regina di Francia", in *Dizionario Biografico degli Italiani,* vol. 70（2008); Solinas, *op. cit.*, pp. 121–122, note 6. 1610年代にメディチ家とも縁のあったアルテミジアは、母后マリアにも接近していたのかも知れない。

12　Solinas, *op. cit.*, p. 122, note 7. 初出：Venturi, 1882, *op. cit.,* p. 214; Impalato, *op. cit.*, 1889, p. 425.

13　Archivio di Stato di Modena, Archivio Segreto Estense, Cancelliria Ducale, Archivio per Materie, *Arti Belle e Pittori,* busta 14/2.

14　なお、翻刻については、個々の書簡の註に示した通り、19世紀にヴェントゥーリとインパラートがそれぞれ出版しているが、本稿はソリナスが新たに書きおこしたものに拠っている。

15　アルテミジアの書簡については、書きおこしが様々な形で出版されている。例えば、1640年代の書簡については、すでにボッターリによる書簡集に収録されており、また、2011年の新たな書簡集は最も網羅的なもので、フレスコバルディ家の文書から出た1610年代から20年代初頭にかけての書簡を含む。Bottari, Giovanni Gaetano, ed., *Raccolta di lettere sulla pittura, scultura ed architettura*, vol. 1, Rome, 1754; Solinas, *op. cit.*

16　美術史におけるアルテミジアの再評価については、1916年にイタリアでロンギによる先駆的な論文が出版されるものの、1970年代以降のフェミニズムの発展を待ってようやく本格化した。特に次の研究は重要である。Longhi, Roberto, "I Gentileschi: padre e figlia", *L'arte,* vol. 19（1916), pp. 245–316; Garrard, Mary D., *Artemisia Gentileschi: The Image of the Female Hero in Italian Baroque Art,* Princeton, 1989; Bissell, R. Ward, *Artemisia Gentileschi and the Authority of Art, Critical Reading and Catalogue Raisonné,* University Park, 1999; Locker, Jesse, *Artemisia Gentileschi: The*

Language of Painting, New Haven and London, 2015.

17 それぞれの初出を示す。Bottari, *op. cit.*, vol. 1, pp. 255–259; Fuda, Roberta, "Un'inedita lettera di Artemisia Gentileschi a Ferdinando II De' Medici", *Rivista d'arte,* vol. 4, ser. 5, no. 41 (1989), pp. 167–171; Galilei, Galileo, *Le Opere di Galileo Galilei,* vol. XVI, Florence, 1905, pp. 318–319.

18 モンテレイ伯のナポリ副王としての活動に関しては、Coniglio, Gioseppe, *I vicerè spagnoli di Napoli,* Naples, 1967, pp. 231–239を参照。

19 《洗礼者ヨハネの誕生》については、主に次を参照。Bissell, *op. cit.* (1999), pp. 249–256.

20 サヴォイア公爵夫人とは、サヴォイア公国の摂政をつとめたマリア・クリスティーナ・ディ・ボルボーネ（Maria Cristina di Borbone/1606–1663）を指す。Solinas, *op. cit.*, p. 105, note 11.

21 Solinas, *op. cit.*, pp. 104–105. 邦訳は次の通り。川合真木子「原典資料翻訳：ナポリのアルテミジア・ジェンティレスキとフィレンツェ宮廷――1630年代の書簡の翻訳と解題――」『Aspects of Problems in Western Art History』vol. 14 (2017)、157–166頁。

22 ソリナスは、書簡1a以前にフランチェスコ１世の注文があった可能性を示しているが、おそらくアルテミジアは支援者開拓の一環として自身の作品を献上したものではないだろうか。Solinas, *op. cit.*, p. 95, note 7.

23 娘の結婚に関しては、1637年10月24日のカッシアーノ・ダル・ポッツォへの書簡で金銭的負担の重さを嘆いている。Solinas, *op. cit.*, pp. 117–118.

24 アルテミジアのイギリス滞在に関しては、主にテルツァーギの研究によって徐々に明らかにされている。Terzaghi, Cristina, "Artemisia Gentileschi a Londra", in Baldassari, Francesca, ed., *Artemisia Gentileschi e il suo tempo,* exh. cat. (Palazzo Braschi, Rome), Milan, 2016, pp. 69–77.

25 オラツィオについては次を参照。Bissell, R. Ward, *Orazio Gentileschi and the Poetic Tradition in Caravaggesque Painting*, University Park, 1981, pp. 113–117.

26 Romanello, Marina, "FRANCESCO I d'Este, duca di Modena e Reggio", *Dizionario Biografico degli Italiani,* vol. 49 (1997).

27 López-Rey, José, *Velazquez: the Artist as a Maker, with a Catalogue Raisonné of His Extant Works,* Lausanne, 1979, pp. 408–409; Trevisani, Filippo, in Pérez Sánchez, Alfonso E. and Nicola Spinosa, eds., *Velasquez a*

Capodimonte, exh. cat. (Museo e Gallerie Nazionali di Capodimonte, Naples), Naples, 2005, pp. 100–101.

28 Wittkower, Rudolf, *Gian Lorenzo Bernini: the Sculptor of the Roman Baroque,* Oxford, 1981, pp. 224–225; Bacchi, Andrea, Catherine Hess, and Jennifer Montagu, eds., *Bernini and the Birth of Baroque Portrait Sculpture,* exh. cat. (Getty Museum, Los Angeles and National Gallery of Canada, Ottawa), Otawa, 2008, pp. 254–256.

29 Getty Provenance Index @ Archival Inventory I–3339, Item 0001–0038 (Este).

30 特に長弟フランチェスコに関しては、次を参照。Bissell, *op, cit.* (1981), pp. 113–117.

31 Solinas, *op. cit.*, pp. 87–88. 邦訳は、川合、前掲文（2012)、105–111頁。

32 フランチェスコがいったんモデナからナポリに戻ったのかに関しては、判然としない。しかし、1635年の５月の時点でアルテミジアは弟の行方を把握していないことから、そのままイタリア中部にとどまっていた可能性もあるだろう。なお、海路と陸路の別も含め、フランチェスコの具体的な経路は判明していない。

33 Terzaghi, *op. cit.*, esp. p. 74, notes 33, 34.